最後まで耐え忍ぶ

マタイ24章3～14節
2022年3月13日
松田 基子 師

3月2日の灰の水曜日から、今年も受難節を過ごしています。 イエス様は人間と全ての被造物の創造主なる神様の独り子として、神様からの人類救済の使命を帯びて、この世に人として、生まれて来られました。 受難節はその人類救済のため、全人類の罪を、その身に引き受け、神の御子の身体で、人類の罪を贖う十字架に架かられる、その道行きの期間です。

イエス様は過越祭を前に、これまでの伝道拠点であった、イスラエル北部のガリラヤを後にして、12人の弟子と共に、最後のエルサレム上りにやって来られました。 イエス様は、エルサレム神殿に上られますと、そこに居た、神様への信仰はそっちのけで、商売をしている献金用のお金に替える両替人たち、犠牲に献げる鳩を売る商人たち、それを買う人々を追い出して、

「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。 ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった」

と厳しく叱責されました。 一方、目の見えない人や、足の不自由な人達が、御許に集まって来ますと、彼らを癒されました。

そんなイエス様に、祭司長たち、民の長老たち、律法学者たち、ファリサイ派の人たちは、いらだちました。彼らは益々イエス様を危険視して、イエス様を捕らえて、十字架刑に処する計画へと動いていきます。 当のイエス様は、淡々として神殿に上って来て、民衆に教えられましたが、マタイ23章37節で、イエス様は、

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽根の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは、応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。 言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない」

と言われました。

イエス様は、ユダヤ人の不信仰と、エルサレムの崩壊を憂いて、嘆かれました。 それと同時に、十字架への覚悟を強められました。 一方弟子達は、と言いますと、全く危機感は無く、ガリラヤの田舎から出て来て、神殿の壮麗さに、心を奪われているだけでした。 マタイ24章1節を見ますと、

「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄ってきて、イエスに神殿の建物を指差した」

と記されています。 弟子たちはエルサレム神殿の壮麗さに、心を奪われていました。 かつて、栄華を極めたソロモンが、財を尽くして建てた、最初の神殿は、バビロン軍に依って破壊され、ユダ王国は滅ぼされ、人々は捕囚の身となりました。 捕囚民たちは、神殿崩壊と亡国を、

『それは自分たちが神様に叛いたために、神様は、イスラエルの信仰を再生するために、滅ぼされたのだ』

と、考え、悔い改めました。

ペルシャがバビロンを倒し、捕囚民に解放令が出されると、ユダヤ人たちは信仰復興、神殿再建を目的として、エルサレムに帰って来ました。帰還民たちが再建した神殿は、貧しいものでありましたけれども、信仰復興と、律法社会の建設に向けて、一丸となって取り組みました。
律法社会は、愈々固められて行きました。 時代を経て、ユダヤは、ローマの支配下に置かれました。 その時に、イドマヤ系のヘロデに、ユダヤの王位が与えられました。 しかし、ユダヤ人たちが、その様なイドマヤ系の王、ヘロデを歓迎する筈もなく、そこで、ヘロデ大王は、ユダヤ人の機嫌取りに、ユダヤ人の心の支えである、神殿の拡張と、壮麗化に着手したのです。

それは紀元前20年とされ、ヘロデ大王の死後も引き継がれて、イエス様の時代も工事は継続中でした。 紀元64年に工事は完成したと言

われています。 イエス様と弟子たちが上ってきたその時も、工事は進められており、その壮麗さに人々を感歎させていました。 弟子たちも心を奪われ、その壮麗さを口にしないでは、神殿から出て来る事は出来ませんでした。

弟子たちは、イエス様にも、その事を共感して欲しかったのです。 しかし、イエス様は2節で、

「これら全ての物を見ないのか。 はっきり言っておく。 一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」

と神殿の完全な崩壊を預言されました。 イエス様の目には、神殿の壮麗さなど、空しいものでした。 **ユダヤ人**は、神様の御心を**悟り**、御心に**従って**、**愛の社会**を築いて行くために、**選ばれた民です**。 彼らは歴史的に、**神様に叛く事**は、**国を失う事**であるということ学んだ筈でした。
それにも拘わらず、彼らは、再びその過ちを犯し、神様の御心に従う社会ではなく、人間中心の考え方に立って潤色した律法社会を造り、指導者達は、自己満足に陥り、神様に叛いて居たのです。 神様が、彼らに再び鉄槌を下されようとしておられる事は、イエス様だけにしか分かりませんでした。

紀元70年に、ローマ軍によって、エルサレムは、神殿諸共破壊されます。 しかし、この時はまだ、宗教指導者を初め、人々は、堅固で、壮麗なエルサレム神殿という、見えるものに依り頼んでいました。 イエス様は、

「一つの石も、ここで崩されずに他の石の上に残ることはない」

と言われましたが、神殿に使われていた石は、岩山から切り出して来る、切り石でした。 大きなものは、2.6m×2.2m×20mもの大きなものです。 こんな石で築かれていた土台と神殿を見ると、当時、考えられていた最強の武器でも、難攻不落と思われました。 それが粉々に破壊されると聞いて、弟子たちは不安になりました。
不安な心を抱えて、イエス様について、神殿の谷向こうの、オリーブ山へと行きました。
イエス様が座られると、弟子たちは、イエス様の許に来て、声を潜めてイエス様に尋ねました。
3節に、

「仰って下さい。 そのことはいつ起こるのですか。 また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか」

と尋ねています。

弟子たちにとって、不動と思える神殿が崩れるなど、想像出来ないことでした。 もし、そんなことが起こり得るとしたら、それは神様が、この世界を改められる終末の時であり、それは、

『メシアが来られる時に違いない』

と思ったのです。 弟子たちは、イエス様がメシアであることを告白していました。 ですからイエス様に聞けば分かると思ったのです。
そんなことが突然起こっては、大変です。
そこで、

「どんな徴(しるし)があるのですか」

と、聞かずにはいられませんでした。 すると、イエス様は、

「人に惑わされないように気をつけなさい。 わたしの名を名乗る者が、大勢現れ、『私がメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう」

とお答えになりました。

ユダヤ人にとって、ローマ帝国からの圧力、搾取は強まれば強まる程、終末思想は強くなりました。 唯ここで、ユダヤ人の終末思想と言うのは、この世界が破壊されて、無くなると言う考えではありません。 救済者メシアが現れて、悪い世界を、終結させ、新しい世界に変わると言う意味なのです。 人間は抑圧に耐えられません。
支配国から過酷な要求がなされれば、耐えられなくなり、必ず武力で抵抗しようとします。
リーダーは、自分をメシアだと考え、周りもメシアとして担いで、反旗を翻すと言うことが、おこります。

使徒言行録の、5章36節には、テウダの反乱の事が記されています。 紀元 132 年～135 年には、バルコクバという人が、自分はメシアだ、と主張して、大反乱を起こしました。 偽りのメシアに共通するところは、憎しみの応酬であり、武力に訴える事です。

『人間はやられたらやり返す』

という、罪の根を持っている以上、報復の鎖は愈々太く、強くなって行き、更に苦しめ合うと言う事が起こります。 イエス様はその報復の罪の連鎖を断ち切って、赦し合い、愛し合う世界を作り出すために、人類の罪を一身に負って十字架に架かって下さるのです。

人類の罪を負って、十字架に架かり、全ての**罪を引き受けて下さるお方こそ**、真のメシア、**救い主**なのです。 イエス様以外に、真のメシアは、居ないのですから、どんなに強力で有能な人物であっても、**人間にメシアを期待しては成らない**のです。 次にどんな徴があるのでしょうか。 6節に、

「戦争の騒ぎや、戦争のうわさを聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。 そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる」

と言われました。

人類の歴史は、有史以来、奪い合い、争い合う歴史を刻んで来ました。 人類の歴史は人間同士の戦い、自然との闘いの歴史だと言えるでしょう。 大きな戦争の度に、その破壊力の大きさに、終末感に襲われます。 今日核の脅威は、一層その感を強くしています。 20世紀は、2つの世界大戦があり、戦争の世紀だと言われて、21世紀こそは、戦争の無い、平和の世界になるようにと、希望を持って21世紀に入りましたが、2001年には、9.11 アメリカ同時多発テロが起こり、イラク戦争、イスラエル、アラブ戦争、シリヤの内戦、アフガニスタン紛争やクレミヤ、ウクライナ東部紛争など、その他にも、地域の紛争は、絶えません。

また、いま、ロシアのウクライナへの軍事侵攻があります。 テレビの画面からは、21世紀の時代に、どうしてこの様な横暴が行われるのかと、悲しみと憤りの声が上がっています。 一方、自然界を見ますと、2011. 3. 11の東日本大震災から、11年を迎えました。 近年、地球の温暖化による、自然災害の激甚化、頻発化への懸念は、愈々強くなっています。 イエス様の時代も、今も、人間の心は罪に支配され、少しも変わっていないと言うよりも、一層悪化している様に思われます。 しかし、イエス様は、

「慌てるな」

と言っておられます。 それはつまり、

『イエス様に信頼しなさい』

と言う事です。 イエス様は、罪が支配する世界を、造り変える為に、新しい神の国をもたらすために、人の子となって、生まれて来られました。 ご自身が、**その罪を引き受けること無しに**は、人類に**新しい世界は、もたらされない**のです。

イエス様は、人類のその罪を引き受けて下さり、身代わりの十字架に架かって、人類の神様に対する罪の贖いを成して下さるのですが、しかし、問題は、

『イエス様こそ、自分の**真の救い主と信じ**、自分の**全存在**を**委ねて**初めて、**救いを受け取る事が出来る**』

と言うことです。

サタンは、人間がキリストの救いを信じないように、受け取らないように、必至に働くのです。 イエス様は、その事を9節に、

「そのとき、あなた方は苦しみを受け、殺される。 また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる」

と言われました。 弟子たちは、イエス様の、十字架と、復活を体験して、イエス様こそ、神様が遣わされた、真の救い主、メシアであることを証しした為に、迫害を受けました。 しかし、驚くべき事は、キリスト教最初の殉教者は、使徒言行録7章の、ステファノですが、彼の殉教の姿は、イエス様の十字架の姿に倣うものでした。

聖霊に満たされ、天を見つめ、栄光のイエス様を見つめ、

「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」

と言って召されて行きました。 とても人間の力ではありません。 多くの殉教者が後に続きました。 日本においても、キリシタン殉教者たちに、同じ姿が見られました。 イエス様は、マタイ10章28節で、

「体を殺しても、魂を殺すことのできない者ど
もを恐れるな。 むしろ、魂も体も地獄で滅ぼ
すことの出来る方を恐れなさい」
と言われました。

また、マタイ28章20節で、
「わたしは世の終わりまで、いつも
あなたがたと共にいる」
と、堅い約束をして下さいました。 そのイエス様に全信頼して、死をも賭して、殉教して行ったキリスト者が居た半面、現実の苦しみに耐えられなかったキリスト者もまた、居ました。 迫害や殉教という、極限状況に、神様の名を叫んでも、助けが無いことに躓きました。自分の身の安全の為に、密告をするという裏切りがあり、それ故に憎み合う様になると言うことが起こりました。

また、11節には、
「偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす」
とあります。 人は誰も耳触りの良い言葉を求めます。 エゼキエル書13章10節には、
「平和がないのに、彼らが、
『平和だ』
と言って、わたしの民を惑わす」
と記されています。 神様に聴かないで、民に迎合する偽預言者が大勢現れ、惑わされるのです。そのような時、どう判断すればよいのでしょうか。信仰者は、
『それが、イエス様が生きられた
生き方なのか』
と、聖霊の導きを常に求めることです。 聖霊に聞いていなければ、誰も易きに流れ、惑わされてしまいます。 自己中心の世界は、結局他者を犠牲にするので、不法がはびこり、多くの人の愛が冷えて、無関心の世界になって行きます。

キリスト者になると言うことは、その様な時代を、キリストに従って生き抜いて行くと言う事です。 しかし、それが何時まで続くのでしょうか。イエス様は8節に、
「これらはすべて、産みの苦しみの
始まりである」
と言われました。 そして、
「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」
と宣言されました。 新しい時代を迎える為には、新しい命の誕生のために、産みの苦しみがあるように、そこには時代の産みの苦しみがあるのです。 それは、自分の努力、頑張りで持ち堪える事が出来るものではありません。 イエス様はそのために、十字架、復活を経て、昇天されたならば、弟子たちを地上における、ご自身の身体として、教会を誕生させ、そこに助け主である聖霊を送られるのです。 イエス様は弟子たちを初め、世々に続くキリスト者たちが、ご自身を頭として、教会の絆に生かされ、聖霊の助けによって、最後まで耐え忍ぶ事が出来るようにと、考えておられました。

聖霊が働かれる限り、福音は全世界に宣べ伝えられ、救われる魂は、起こされて行くのです。イエス様は、十字架に、人類の罪を贖い、復活して天に帰られたならば、1人でも多くの人が、御救いを受ける事を待って、神様の時が来た時に、必ずこの世界を終結させて、新しい神の国をもたらす為に、再臨されるのです。 私達は、この歴史観に立って、神の国が来る事を待ち望んで、イエス様の約束に賭けて、互いに信仰の絆を強め、祈り合い助け合い、信仰を全うして行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

今日の時代は、イエス様の時代と同じく、サタンが闊歩し、罪と悪の満ちる世界で、時代は困難が増し、不信仰への誘惑に満ちています。

どうか、聖霊の助けをお与え下さい。 常にイエス様を見上げ、この世に惑わされず、最後まで、耐え忍ぶことが出来ますように、弱い私達をお助け下さい。 今苦しみの中にある方々をお助けください。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。